



多摩六都科学館 事業評価報告書

平成29年度～平成31年度（3カ年）の中期計画における
平成29年度実績報告ならびに事業目標の達成度等に関する評価報告

本報告書の構成

多摩六都科学館における事業評価の基本的な考え方	1頁
多摩六都科学館事業評価票	
1. 指定管理者による自己評価ならびに外部評価 —5つの事業目標ごとの評価— ①～⑤	2～14頁
2. 多摩六都科学館組合による自己評価ならびに外部評価	15～19頁
3. 総評 使命ならびに活動理念の評価	20～21頁
参考資料	22～24頁

平成30年7月

多摩六都科学館組合

指定管理者：株式会社 乃村工藝社

1. 多摩六都科学館における事業評価の意義

多摩六都科学館は、平成25年度に策定した第2次基本計画（平成26年度～平成35年度）に基づき、事業評価を実施する。事業評価を導入することによって、基本計画に掲げた使命ならびに事業目標の達成度や事業の取組姿勢・進捗状況が検証可能な中長期的目標管理システムの構築をめざす。

評価結果を事業の修正、翌年度の予算編成や事業計画に反映させ、計画（Plan）－実行（Do）－評価検証（Check）－改善（Action）のPDCAマネジメントサイクルを機能させ、継続的な業務改善・サービスの向上が図られるよう努める。また、評価結果を公表することにより、構成市ならびに圏域市民に対して、公の施設としての社会的説明責任を果たし、公的事業の透明性を図るものとする。



2. 事業評価の進め方

平成26年度は試行として進め、業績指標・検証方法などの検討を行い、本格導入は平成27年度からとする。多摩六都科学館の事業評価は、中期で事業方針を定め、その進捗状況や目標の達成度を経年変化で検証する。第1期は平成26年度～平成28年度、第2期は平成29年度～平成31年度の3力年とする。

各年度の事業評価は、多摩六都科学館組合と指定管理者が自己評価（1次評価）を行い、さらに事業評価委員会（構成員は科学教育や博物館運営に関わる有識者と圏域の市民）による外部評価（2次評価）を行い、その結果を事業評価報告書としてまとめ、事業報告書とともに構成五市に報告し、情報公開という流れで実施する。

		第2次基本計画の期間（H26～H35）									
年度	H26	H27	H28	H29	H30	H31	H32	H33	H34	H35	
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	
中期	3力年			3力年			3力年				

3. 事業評価の概要

評価実施者	評価の種別	概要（評価対象ならびに進め方など）
指定管理者	自己評価 1次評価	第2次基本計画に定めた「使命」ならびに「活動理念」「5つの事業目標」に沿って、指定管理者が定めた「事業計画の基本方針」（中期3力年の事業目標）の進捗状況・妥当性・達成度・有効性について、年度毎に自己評価を行う。指定管理期間終了年度には中期における取組について総評を行う。各年度の事業結果の詳細は、「事業報告書」をとりまとめ、報告・公表する。
多摩六都科学館組合	自己評価 1次評価	第2次基本計画に定めた「使命」ならびに「活動理念」「5つの事業目標」が達成できるよう、計画された「重点戦略」および「中期で重点的に取り組む戦略」のうち、組合が推進すべき取組について、進捗状況・妥当性・達成度・有効性について、年度毎に評価を行う。指定管理期間終了年度には中期における取組について総評を行う。
事業評価委員会	外部評価 2次評価	第2次基本計画に定めた「使命」ならびに「活動理念」「5つの事業目標」に向かって科学館の管理運営を推進できたかを、年度毎に外部評価を行う。指定管理期間終了年度には中期における取組について総評を行う。

4. 業績指標の検証方法

多摩六都科学館では、下記方法で業績の検証を行う。数字だけでは実態を把握できない取組姿勢や進捗状況なども定性的に自己評価し、中長期的な目標の達成度を検証できるように試みていく計画である。

類型	検証時期	検証方法	ベンチマークス	調査実施者
A	毎年	結果データを定量的に検証	経年変化を検証	指定管理者
B	毎年	取組内容を定性的に検証	経年変化を検証	指定管理者
C	毎年	利用者を対象にアンケートを実施し、定量的なデータを測定し、検証	経年変化を検証	指定管理者
D	毎年	市民モニター等を対象にインタビュー調査を実施し、定性的に検証	経年変化を検証	組合（指定管理者協力） H27年度から実施
E	中期の区切りで	圏域市民を対象にアンケートを実施し、定量的なデータを測定し、検証	平成28年度のデータと比較し、変化を検証	組合（指定管理者協力）
F	中期の区切りで	事業評価委員会・市民モニターが取組内容や成果を定性的に検証	平成25年度、28年度の状況と比較し、変化を検証	組合（指定管理者協力）
G	中期の区切りで	設定ターゲットに対して内容や成果を定性的に検証（FGI）	H31に実施、効果を検証	組合（指定管理者協力）
H	中期の区切りで	設定ターゲットに対してアンケートを実施し、定量的に検証	H31に実施、効果を検証	組合（指定管理者協力）

5. 段階評価の基準

自己評価の目標の達成度ならびに外部評価の評定は、段階評価で実施する（詳細については別紙参照）。

評価	評価内容・基準
A++	優良：目標を超える成果を挙げている。内容が特に優れている。
A+	良好：目標に対し良好な成果を挙げている。内容に優れた点が見られる。
A	適正：計画に則して目標を達成している。内容が適正である。
B	改善：目標が達成できていない点がある。もしくは内容の改善が必要である。
C	見直し：目標がほとんど達成できていない。抜本的な改善が必要である。

1. 事業目標ならびに事業方針

注：事業目標・取組方針内の赤字は、「ローリングプラン2016」で修正された箇所。

第2次基本計画			指定管理者・事業計画
事業領域	事業目標-1	取組方針	H29年度～H31年度（中期）事業の基本方針
事業計画 科学館事業 (中核事業)	<p>多様な学びの場の創出</p> <p>多摩六都科学館は、これまでの科学館事業を継承しつつ、さらに活動や場を拡げ、誰もが科学の楽しさをともに体験でき、科学リテラシーを高められる科学館をめざします。</p>	<p>多摩六都科学館の中核事業です。「科学を楽しみながら学べる科学館」「子どもたちの科学する心を育む科学館」像はこれまで通り大切にしつつ、幅広い年齢層も利用できる施設へと徐々に領域を拡げます。多くの方々が科学の楽しさに触れ、新たな価値を発見できる科学館像の実現をめざします。</p>	<p>科学の楽しさを実感できる学びの場と機会を創造する。</p> <p>多摩六都科学館の新10年計画（第2次基本計画）の使命として掲げられた『多様な「学びの場」の創出』と、科学館事業目標である圏域市民の「科学リテラシーを高める」を達成させるためには、2020年からの学習指導要領にもある『主体的・対話的で深い学び』を実現する事に重なる。これは「実感を伴う理解の場と機会を提供する」対話的・体験的な事業の実現でのみ可能と考えられます。このため、標本・装置の充実、専門性とエンジョイメントの両立、参加体験でのコミュニケーション(解説計画)のさらなる充実をめざします。</p> <p>中核事業の活動のテーマでもある「DO！サイエンス」とは、「実感を伴った理解を図る学習活動」の場と機会の提供し、その中で、観察・実験・工作といった学校では体験しにくい活動を重視します。</p>

2. 中期の重点戦略ならびに業績指標

赤字：新規の指標あるいは「ローリングプラン2016」で改訂された箇所 セル黄色：市民モニター関連

3. 評価結果・指標の実績結果

重点戦略	事業概要	業績指標	定量	検証方法	中期目標（目標値）	前中期			今中期			中期3カ年	H28調査
						H26	H27	H28	H29	H30	H31		
						実測値	実測値	実測値	実測値	実測値	実測値		
<p>専門性とエンジョイメントを基本とし見通しを持った体験による実感を伴った理解とコミュニケーションを重視した、探求的で主体的な学びとなる事業を行います。</p>	II-1. 科学館事業全体	●「コミュニケーション重視の体験が充実」と答えた人の割合	*	C	今後、測定予定								
		●「科学の楽しさを実感した」と答えた人の割合	*	C	"								
		●科学への興味喚起度（利用者調査・定量的）	*	C	"					89.3%			
		●科学への興味喚起度（市民モニターが検証・定性的）		D				A+	A+	A+			
		●幅広い年齢層からの支持（削除）	*	C									
		●常設展示 満足度（館内アンケート）	*	C	80%以上が満足	78.1%	84.5%	79.8%	74.8%				
		●企画展示 満足度（①館内アンケート、②会場アンケート）	*	C	80%以上が満足	①72.0% ②85.0%	74.0% 89.0%	81.5% 83.7%	①74.8%				
		●①プラネタリウム・②大型映像 満足度（館内アンケート）	*	C	80%以上が満足	①92.5% ②83.3%	90.4% 76.2%	89.8% 79.5%	①90.1% ②78.3%				
		●参加体験型学習プログラム 満足度（各プログラムで実施しているアンケート）	*	C	80%以上が満足	99.0%	99.0%	99.0%	99.9%				
		●学校団体 総合的な満足度（参考値：学習投影での学習効果が高いとチェックした割合）	*	A	H29は未測定				81.0%				
		●" 展示に対する満足度（参考値：展示見学での学習効果が高いとチェックした割合）	*	A	"				85.0%				
		●" 学習効果（参考値：学習プログラムでの学習効果が高いとチェックした割合）	*	A	"				72.0%				
		●「主体的・対話的で深い学び」に対応するプログラムの開発や実施に向けての取組		B					実施				
		●ソーシャル・インクルージョンに基づく活動への取組		B					実施				
		●ソーシャル・インクルージョンに基づく活動への取組		D					B				
●リピーターの比率の維持	*	C	50%～60%を維持				58.4%						
●ファミリー層の新規利用者の増員をめざした取組		B	検討/実施				実施						
●年齢別プログラムや事業の取組数（削除）	*	A											
●「誰もが科学を楽しめる科学館」としての評価（削除）		D											
<p>展示や教育普及活動がさらに充実するよう、科学館事業の基盤となる収集・保存・調査研究活動の強化を図ります。特に東京の自然史（地域資源）を重要テーマと位置づけます。</p>	II-1-1	●調査研究活動		B	検討/実施	実施	実施	実施	実施				
		●標本資料屋装置の充実（研究成果の市民への還元）（削除）		B	検討/実施								
		●多様なジャンルとのコラボレーション企画開発		B	検討/実施				実施				
		●地域連携イベントなどの実施							実施				
<p>多様なテーマ（健康・食・芸術など）を科学的なアプローチで探求し、科学に興味のない方でも来てみたいと思わせる事業展開を図ります。様々な利用者層に合わせたプログラムで、科学への興味を引き出す場をつくりだします。</p>	<組合>	行政への働きかけや体制整備に向けての取組（削除）		B	検討/実施								
<p>館内だけでなく、地域全体にも活動フィールドを拡げ、多くの方々が科学の楽しさを体験できるよう、アウトリーチ活動を推進します。特に来館しづらい環境にある学校に対してアウトリーチ活動を行っていきます。</p>	II-1-5-4 II-2全体	●圏域五市小学校へのアウトリーチ活動	*	A	各市1校ずつ5校実施	10校	11校	12校	10校				
		●圏域五市中学校へのアウトリーチ活動	*	A	5市で1校は実施	3校	2校	1校	1校				
		●その他の機関などへのアウトリーチ活動		B	検討/実施	実施	実施	実施	実施				
		●ボランティアによるアウトリーチ活動		B	検討/実施	実施	実施	実施	実施				
		<組合>		B	検討/実施								
<p>市民や機関と連携を図り、圏域内に科学教育の場が拡がっていくことも視野に入れて事業展開を図ります。</p>	<組合>と協働	●圏域内でのアウトリーチ活動の推進		B	検討/実施				実施				

赤字：新規の指標あるいは「ローリングプラン2016」で改訂された箇所 セル黄色：市民モニター関連

↓別表参照

重点戦略	事業概要	業績指標	定量	検証方法	中期目標（目標値）	前中期			今中期			中期3力4	H28調査	
						H26	H27	H28	H29	H30	H31			実測値
	中期的な指標 (主は組合・指定管理者協力)	「誰もが科学を楽しめる科学館」としての評価（定量）（削除）	*	E										
		圏域市民の科学リテラシーの向上（科学への興味喚起度）（定量）												
		指標：指標：生活の中で役立つ科学の知識が身につく、世界の課題を科学的な観点から考えることができる科学館	*	E										A+
		圏域市民の科学リテラシーの向上（科学への興味喚起度）		F										A+
		科学の担い手の育成（定性）		F										A+
		継続的なユーザーの評価		G										
		「科学館での体験を通して、考え方や生き方に変化が生まれたか」そのような事業を行っているか（定性）		F									A+	
ひとりで展示を見るだけでなく、その場に参加した人たちで、ともに気づきあけていくプログラムへと転換を図ります。	Ⅱ-1全体	参加体験型の学習活動の拡充（削除）		B	検討/実施								実施	

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総合的な意見等）
H26	<p>実質的コミュニケーション実現のため、下記事業を行った。</p> <p>寄贈標本整理による常設展示の充実、利用者層別・ラボ別プログラムの品揃えの充実、常設化を意図した内製企画展の実施、単なる生解説の領域を超える観客と会話するブラネタリウム番組の提供（2か月毎に更新）等。</p> <p>これらの事業によって「DO！サイエンス」を実現する事業展開のための基盤の整備を推進できた。</p>	<p>各常設展示室のコア部分の改良を優先順位を決めて取り組み、各部屋ごとの科学体系を充実させる。</p> <p>寄贈標本の体系化を果たし、常設展示をさらに充実させる。</p> <p>平成26年度に作成したベータ版の展示ストーリーブックを充実させ、関係者の展示内容把握を高め、展示ツアー等によるコミュニケーションの深度を高める。</p> <p>その他、誰もが利用しやすい科学館をめざし、障害者配慮型のプログラム開発についても、さらに充実を図る予定である。（事業目標2より移動）</p>	A	A+	<p>ブラネタリウム・参加体験型学習プログラムの満足度は、9割以上と非常に高い上に、科学館事業全体を鑑みると大変よくやっていると思う。また、リピーターの比率が高い割合を維持していることから事業の充実度を窺い知れる。</p> <p>常設展示の満足度は目標値の80%に達していないが、26年度から継続的に常設展示のコンテンツの充実を図っており、その取組姿勢は評価したい。自己評価はAと控えめであるが、当委員会ではA+の評価とする。</p>
H27	<p>既存の寄贈標本は、新規標本の登録整理の完了に合わせ、常設展示に組み入れて再構成し充実を図っている。</p> <p>地球の部屋では今年度寄贈を受けた3点（鉱物2点、化石1点）に解説パネルを付け常設展示とし、鉱物、岩石標本の解説と展示位置を改良した。</p> <p>今年度相互協力協定を締結した国立極地研究所の協力で、南極昭和基地のリアルタイム映像を常時放映する等、地球の部屋の展示が充実してきている。</p> <p>再生中の館庭雑木林では、実生のクヌギ・コナラの保護や観察を行い、他にも、東京大学生態調和農学機構での「食と農の体験塾 大豆編」・「タキギ編」・「稲観察編」、柳瀬川投網による魚の生息調査、西原自然公園の樹木更新作業等、地域の活動への積極的な参加とレポートを行った。</p> <p>昨年度の課題であった「誰もが利用しやすい科学館をめざし、障がい配慮型のプログラム開発」で、平成27年度から「おもいやりブラネタリウム」として、月1回障がい者や小さな子供連れが安心して観覧できるきプログラムを開始し好評を得ている。</p>	<p>中核事業と地域拠点事業を具体的に『地域づくり』につなげるべく各展示室のコンセプトを押さえたらうて、引き続き各常設展示室の改良と充実に取り組み。企画展の標本・装置・模型は常設展示化に耐えるクオリティで作成し常設化することや、寄贈標本の登録整理・体系化を進め、展示室の活性化を図る。</p> <p>調査研究活動についても中核事業・地域拠点事業の関係を意識し、地域の各種団体と協力しつつ、再生中の館庭雑木林や地域の自然に関する調査を継続し、その成果を展示し市民に発信する。</p> <p>「シニアキャンペーン」は始めてから4年で大きな成果を上げ始めており、「おもいやりブラネタリウム」も定着をめざし継続することが重要と考える。</p>	A	A+	<p>市民から寄贈された標本を整理・登録し常設展示に活用することは、当館の事業として重要なことであり高く評価できる。</p> <p>常設展示及び企画展示の満足度が過去最高を示したことは、展示の充実を物語っていて、市民モニターの評価も高い。</p> <p>また、関係機関との連携を深め、その情報を発信し、さらに前年度の課題であった多様な利用者に配慮したプログラムを開始し好評を得ていることも高い評価につながるものである。</p>
H28	<p>杉並区立科学館の閉鎖に伴い、約220点の標本寄贈を受け入れた。さらに今年度は地学系標本として隕石や化石を購入して展示し、さらなる常設展示の充実を図っている。また、来年度に博物館相当施設となるべく、既存標本の整理を進めると共に収蔵庫整備を進めている。</p> <p>企画展では、夏の企画展は3年ぶりに「昆虫展」を開催し、昆虫人気を反映し、この期間だけで利用者が昨年度比約1万人増となり、今年度25万人を超えとなった大きな要因と言える。さらに、秋には主にシニアをターゲットとして、奈良文化財研究所の協力のもと、文化的イベント「キトラ古墳」を題材とした企画展を開催した。</p> <p>昨年度の今後の取組方針で記載した「おもいやりブラネタリウム」を今年度も継続しているが、これを目指して来館する方が増えてきている。</p>	<p>平成29年度には博物館相当施設となる予定であり、今後さらなる収蔵品の充実と整理、またそれら展示や解説力の強化を進める。</p> <p>50歳以上の世代に関しては、大人向けコンテンツを充実させることで利用促進を図り、結果にも現れているが、中高生や20歳代の青少年層の利用が極端に少ないことが課題となっている。中高生をターゲットにしたイベントを開催しても、中高生よりも大人の参加者が多い状況であり、情報の発信方法や開催日時の検討など、別の切り口から取り組むこととする。</p>	A	A+	<p>各指標とも概ね平成27年度の数値よりも高まっており、博物館相当施設をめざしていることも評価できる。</p> <p>夏の企画展では、質の高い標本を活用した興味深い昆虫展を実施し、多数の来館者を集めることができた。また、シニア向けの企画や「おもいやりブラネタリウム」など良い企画が継続的に実施されていることは大変意義深い。科学館の定性目標と定量目標である集客の両方を成し得ている事業展開を大いに評価したい。</p> <p>今後は、依然として増えない中高生・若者の利用促進は課題ではあるが、数ではなく興味関心の高い層をねらう必要があると思う。また、増加しているリピーターに対する学習効果の分析にも取り組んでほしい。</p>

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総括的な意見等）
H29	<p>東大農場・演習林を守る会やむさしの自然史研究会と東大農場・演習林や館庭の昆虫調査を実施。今後、昆虫調査結果を整理し、展示室4「しぜんの部屋」に展開する。</p> <p>夏の企画展では初めて数学をテーマとし、パズルを切り口として楽しみながら数学に触れる内容で開催、昨年昆虫展には僅かに及ばなかったが期待通りの集客結果を得た。</p> <p>大人向け平日講座として『大人のための地球科学入門』をテスト的に2回開催、当初は参加者が来るか懸念されたが、2回共に満席となる参加者となった。</p> <p>大人向けプログラムはサイエンスレクチャーやサイエンスカフェが中心であったが、今後このような講座の開催も進めていく。</p> <p>サイエンスカフェでは、I P M Uとの協力で初めて外国人講師による全英語（通訳なし）で開催したところ、従来より中高生の割合の高い開催となった。英語で質問する中学生もいて非常に活発なカフェとなった。</p>	<p>地域の自然保護で活動している個人や市民団体からは、地域のハブとして生物・植物のデータベース機能を館に期待されているが、費用の面やスタッフの面もあり、どれだけ期待に応えられるかが今後の課題。少なくとも館庭の生きもの調べは継続していく。</p> <p>パズル展は、貸出開催のオファーも受けるほどの高い企画精度といえるが、今後はこのようなコンテンツを他施設（乃村工芸社の指定管理施設以外を含め）に展開するか（できるか）を検討していきたい。</p>	A	A	<p>現状に満足せず、常にミッションを達成するために、独自の企画や新しい挑戦に取り組んでいる姿勢が素晴らしい。具体的には、大人向けの平日講座、全英語のサイエンスカフェ、数学をテーマとした企画展、活発なアウトリーチ活動など。今後も、これらの事業を継続的に発展させてほしい。</p> <p>また、学習投影が平成29年度に圏域の全校が参加した実績は、これまでの継続的な努力の賜であり、この点も大いに評価したい。</p> <p>科学館事業を推進する体制として、地域で活動している個人や団体との関係を強めていることも大きな成果と言えよう。ただし、アンケートで来館者の「満足度」が80%を切っている事業がある点をどう読み取り、今後どう対応していくかの検討が必要。</p>

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総合的な意見等）
H26	<p>多摩六都のボランティア活動は、100人を超える規模、参加しやすい曜日システム、参加頻度の高さが証明するように科学館が地域と密接につながっているという点で大きく評価できる。ボランティア規約も地域の方が自律的に作成するなど地域の活動拠点になっており、ボランティア＝地域の方が主人公という先端事例になりうる。</p> <p>ボランティアの活動場所も、常設展示の体の部屋、しくみ・自然・地球の各ラボ、科学学習室、さらにアウトリーチまで活動の幅を広げている。ジュニアボランティア制度も軌道に乗り、圏域市民のボランティアスピリットを高める面でも成果を上げつつある。</p>	<p>今後は、ボランティアによる自主的なプログラム開発や自立型プログラム運営の実現に向け、「自分の科学館」として活動できる場となるよう、サポートを行う方針である。</p> <p>また、友の会は、今後、年間パスポートサービスだけでなく、科学館の成果（科学リテラシーや地域リテラシーの向上）を検証する際の市民モニターの核として参画できるよう、取り組みを試みていく計画である。</p>	A+	A+	<p>ボランティア参加人数の規模、ボランティアによる自律的な運営体制、圏域へのアウトリーチ活動や自主事業の開催、ジュニアボランティアの育成など、大変めざましい成果が見られ、大いに評価したい。また、ボランティアの9割以上が構成五市の住民であることから、多摩六都科学館が地域拠点として機能していると言える。今後は、ジュニアボランティアや友の会会員の成長について追跡調査を実施し、長期的な成果を提示していく努力も必要と思われる。</p>
H27	<p>ボランティア活動は執行部の刷新と会則一部改訂も実施、極めて活性化している。ボランティア主催事業回数がほぼ2倍に増えており、増加分はボランティア自身による新たなプログラムとなっておりより自立化に進んでいる。ボランティアによるアウトリーチ活動も平成27年度は10回実施されており、活動の場が科学館の外にも広がりを見せている。</p> <p>ジュニアボランティア活動には子供達に対する教育の側面があり、平成27年度は「つくる部」を立ち上げ、モノづくり活動とその活動成果を来館者に対し自ら説明する発表会を実施した。体験活動と言語活動のセットの意味は大きい。</p>	<p>より自立したボランティア活動をめざし、一人一人が得意分野を生かせるよう実質的にサポートし、館内ではからだの部屋以外での活動、館外では地域づくりに関連した活動を意識し広げていただく。ジュニアボランティアは教育の一環としても成果を上げており、またそこから得るノウハウは大きい。希望者数増に 대응するため、ジュニアボランティアの組織形態を検討し未来の地域づくり人を育成すべく前向きに新組織化に向け計画検討する。</p> <p>友の会はこれまでの単なる①年間パスと、新たに②科学館サポーターを設け、新たな友の会とスタートするよう進めており、平成28年度に条例を改定し平成29年度からの実施を目指す。</p>	A+	A++	<p>ボランティアに活動の場を提供し協働することは、当館の重要な役割であり、地域交流の拠点としても大きな意義がある。自立したボランティアが新たなプログラムを館内で実施することは、科学館の魅力高めることにつながり、アウトリーチ活動により地域への広がりだけでなく館のPRにも貢献している。</p> <p>また次世代の育成に寄与するジュニアボランティアの新たな活動は、地域の子どものサイエンスリテラシーの醸成にもつながり、長期的な視点からも高く評価できるものである。</p> <p>ボランティア活動と友の会の活動が活発に行われていることは、ボランティア主催事業回数及びボランティアの科学館事業支援延べ人数の大幅増加にも見て取れる。</p>
H28	<p>ボランティア活動はさらに活性化しており、ボランティア主催事業の回数は昨年比で約30%増の33回の実施となり、アウトリーチ活動も2回増え12回の実施となっている。</p> <p>ボランティア活動費用は指定管理者が費用処理と管理を行っていたが、今年度からは一括で活動支援費をボランティア会経費として計上し、会が執行・管理をするようにし、ボランティア会活動のさらなる自立が進んだ。</p> <p>昨年の課題として記載したジュニアボランティアの組織形態の改善に関しては、活動3年目に入り、館内での活動内容を自ら計画することとし（1、2年目は活動内容を指定管理者が指示している）、ジュニアボランティアに対しても自立化を促している。</p> <p>同じく昨年の今後の取組方針で記した、友の会制度の年間パスポートとメンバーシップ制度への改編は、条例の改正を受けて平成29年度から開始する。</p>	<p>ボランティア会の自立化をさらに進めるが、指定管理者として支援すべきこととボランティア会として独自で行うことをお互いに認識し合い、現状の良好な関係を今後も継続していく。</p> <p>友の会の年間パスポートとメンバーシップ制度への改編が平成29年度から開始されることに伴い、それらが利用者にどのように受け入れられるかを随時検証し、修正を図る予定である。</p>	A+	A+	<p>ジュニアボランティアが活発化し自立化が進み、指定管理者とボランティアとの関係も円滑で、世代を超えたコミュニケーションの地域拠点としても機能していると感じる。また、ボランティアや友の会の活動によって、圏域市民が多摩六都科学館を「市民の科学館」として意識できる要因となっている。今後も、これらの活動が重要であり、それを育成してきた努力は大きく評価できる。</p> <p>確かにボランティア活動の充実には目を見張るものがあるが、半面各人がやりたいように実施している面もあり、科学館事業として一貫性に欠ける感もあるのが今後の課題と言える。</p> <p>地域との交流は非常によい成果をあげているが、科学館がハブとなって地域の団体をつなぐ活動など、まだ発展の余地も多々あるように感じる。年間パスポート等の制度改正が行われることから、さらに今後に期待したい。</p>

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評定	総評（総合的な意見等）
H29	<p>ボランティア活動は活発に行われていると共に、会としてほぼ独立した組織としての体制が整い自律的な運営がされている。指定管理者として必要最小限の支援を引き続き行うが、サポートの立場に留め、さらなる自立を促す。</p> <p>指定管理運営開始以降に活動に加わられた方の新規プログラムと、ベースとなっている活動のバランスと内容が充実し、さらに活動が活性化し利用者から高評価を得ており、他施設からのボランティア活動に関する視察が増えている。</p> <p>昨年度までの友の会の年間パスポート機能とメンバーシップ機能の分離に関し、年間パスポート購入数は友の会会員数の3倍以上に達し、しかもその2/3が圏域市民であり、圏域市民リピーター増＝圏域還元に大きく貢献できている。</p> <p>逆にメンバーシップ入会者数は友の会会員数の1/3となっている。</p>	<p>ボランティアの代表、執行部のスムーズな代替わりがスタートし2年経過したが、意識の高い方と遠慮深い方の調整が課題。ジュニアはやはり社会的ニーズの反映なのか50人と大幅増。しかし経験豊富な先輩が指導するなど、いい方向に向かっており、きっちり育成し地域人の先導としたい。</p> <p>メンバーシップに関して、大型映像試写会招待やプログラムの優先参加権は今後も継続するが、今後はさらにパイロットプログラムのモニター参加者としての位置づけを強化し、今まで以上に来館者ニーズに合ったプログラム開発に役立つ役割を担ってもらうことにより、館とメンバー両者に取り良い関係構築を進める。</p> <p>またメンバーの適正人数を見極めていく。</p>	A	A	<p>ボランティアの科学館事業への支援延人数や主催事業が50回以上という高い数値であること、自律的な運営を行っていることは大いに評価できる。</p> <p>ボランティア活動自体は活発でA+と評価できるが、科学館側がボランティア活動の「支援」から「連携」に軸足を今年度から移したばかりで、十分な活動連携には至っていないため、今年度はA評価とする。</p> <p>ジュニアボランティアの人数が増え、活発な活動が行われていることから、将来につながる地域との連結が生まれていることがうかがえる。</p> <p>友の会制度を見直し、年間パスポートとメンバーシップ（ロクトメンバーズ）に分離したことによって、年間パスポート購入数が旧友の会会員数の3倍に達したこと、圏域割引を設けたことは、良い試みであったと思う。今後は、ロクトメンバーズへの加入数を増やすための方策を検討してほしい。</p> <p>活動指針としてソーシャル・インクルージョンを掲げたことによる、これからの活動展開に大いに期待している。また、「地域のハブになる」という目標に対して、市民モニターの意見は非常に重要なので、そこで上がってきた問題点に今後も引き続き向き合い、事業計画などに反映してほしい。</p>

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総合的な意見等）
H26	<p>大学側・研究所側の社会貢献というニーズを反映し、連携・協働事業は市民も加わる形で活発に実施できた（東京大学国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構、高工エネルギー加速器研究機構、東京大学宇宙線研究所、国立天文台、東大農場・演習林等との事業）。</p> <p>「多摩・島しょ子ども体験塾」を通して、企業連携を深めることができた。シチズン（株）、グローブライド（株）はプログラム提供レベルに達している。</p> <p>市民連携では、自然保護の市民団体と活動目標・地域自然の価値を共有でき、活動を科学館中核事業として位置づけることができた。エコミュージアムのサテライト活動と科学館を中核とした活動の地域連携が始まった。</p>	<p>今後は、機械振興協会・技術研究所（東久留米市）と協力し、地域の福祉系との協働をサポートしていきたい。また、多摩地域の情報通信研究機構、国立極地研究所と連携を進め、新たなプログラムや企画展の開発を推進していく意向である。</p> <p>市民連携では、自然保護の市民団体の高齢化が進み、次世代の活動メンバーの組織化をサポートすることが重要課題となっている。自然系の連携先は進んでいるが、デジタル系の市民連携が展示や運営面での課題である。下野谷遺跡等、科学館と無縁に見える地域資源も、地球の部屋の武蔵野台地の視点と関連付け、地域の文化として展示化を検討する。</p>	A	A+	<p>初年度でありながら、精力的に地域連携事業を実施しており、その取組姿勢は大いに評価できる。今後、地域産業や産物を科学的観点から価値づけ、発信していく媒体として科学館が機能し、地域にとってかけがえのない存在に成長することを期待している。</p> <p>また、スタッフひとりひとりが「公の施設」の運営に携わる者として自覚を持ち、成長してほしい。</p>
H27	<p>西東京市の下野谷遺跡が国史跡に指定されたことを受け、圏域5市にある遺跡を集めた遺跡展を開催した。科学館での開催を特徴付けるため、単に発掘品を展示するだけではなく、現在の圏域地図上に発見される遺跡群を重ねることにより、遺跡と地形の関係性が理解できる展示とした。また、柳瀬川や金山緑地等での自然観察会を実施し、市民との連携でそれぞれの自然を保護している団体と協力して事業を行った。</p> <p>研究機関等との連携では、平成27年度は新たに東京大学宇宙線研究所、及び国立極地研究所との間で相互協力協定を締結し、市民が最先端科学技術に触れる機会を提供する幅が広がっている。</p> <p>圏域内の最大の交通機関である西武鉄道と協力し鉄道展を開催した。圏域を模した鉄道ジオラマを置き、そのジオラマ上に来館者が作ったペーパークラフトの家や車を置いていくことにより、鉄道に沿って町が発展していく様子を表す市民参加型の展示も設置した。</p>	<p>行政・公共施設・企業・市民団体・学校・研究機関等数多くの団体との連携による事業を展開しているが、まだ各団体と科学館との2者での活動が多い状況にあり、今後複数の団体が協力・協調した事業が展開できるように長期的な取組みが必要と考える。</p> <p>また、現在先端科学技術の面では宇宙や物理への偏りが強く、地域の自然科学の面では、地質・動植物への偏りが強い状況にあるので、他の分野への広がりを検討する。</p>	A+	A+	<p>地域の国史跡指定を受けたタイムリーな企画展示、緑地や河川での自然観察会の実施は、市民に「地域の宝」としての価値をアピールし、地元への愛着心を高めることにも貢献している。</p> <p>来館者とともに作り上げる鉄道ジオラマは市民参加型展示としての評価だけでなく、圏域最大の交通機関である西武鉄道の協力を得ての展示が「街づくり」の体感をもたらし、自分の住む街を身近に感じることもつながるなど、当館の特徴を活かしたものと評価でき、市民モニターの評価も高い。</p>
H28	<p>西東京市にある東京大学生態調和農学機構とは、3年間にわたって実施している「農と食の体験塾」や、小学校の総合学習のフィールドとしての利用協力等、数多くの連携事業を開催しており、今後更なる連携を深めるため、平成29年6月に相互協力協定を締結することとなった。また、圏域にある自然をフィールドとした自然観察会も毎回定員を超える応募があり、圏域にある自然に対し興味を持つ市民が増えてきている。</p> <p>多摩北部広域子ども体験塾では、西武鉄道の協力により貸切車両に乗って自分たちが生活する町の魅力を見出し、その魅力を伝えるラジオCMを作成し放送する「たまろくトレイン探検隊」を実施した。</p>	<p>東京大学生態調和農学機構との連携が新たな段階に入るに当たり、学問としての「農と食」に加えて、地域産業としての「農と食」に関する情報発信に取り組む。これを皮切りに、各種分野での地域をベースとしたイベント開催をさらに増やしていくことを検討する。</p>	A+	A+	<p>連携先を広げ、積極的な情報発信を行うことで多方面での認知度が向上している。</p> <p>地域との交流によって科学館の活動やコンテンツが拡充しつつある点、市民との活動成果をラジオ（コミュニティFM）を活用して情報発信した点、学問としての「農と食」に加え、地域産業としての「農と食」に関する情報発信に取り組んでいる点については高く評価したい。</p> <p>地域拠点事業は確実に進展しているが、今後は、「地域づくり」の観点から、科学を通して地域住民同士がもっとつながるような活動が必要である。</p>
H29	<p>秋の企画展では、食とからだをテーマとし科学的観点からの食とからだの関係性を展示すると共に、地域の農家と連携し、食と農への取組の展示や、特産品と直売所の紹介も実施した</p> <p>春の企画展では構成5市を流れる川（小平市は玉川上水）をテーマに、それぞれの川を守っている自然保護市民団体と協力し、圏域内外の来館者にその文化歴史や自然の生態の魅力を紹介する展示を実施した。</p> <p>東久留米市出身のアーティスト小島真木さんに、全88のオリジナル星座絵を依頼、その絵をもとにプラネタリウム番組を作成し投影。シニアにも満足いただける内容であるため特に圏域からの集客に貢献し、6月の入館者数の記録を塗り替えた。</p> <p>また、投影期間に合わせ、今年度からカフェを運営し地元野菜をふんだんに使ったメニューを提供している『六都なおきち』とのコラボレーションで『大人のカフェ&シアター』キャンペーンを平日限定で実施し、これも好評を得た。</p>	<p>春の企画展・秋の企画展では今まで交流の無かった地域の農家の方や、地域の自然環境保護系市民団体の方とのつながりが広がった。</p> <p>この自然環境保護系市民団体は、高齢化の悩みを共通に持っており、運動を切らさないための科学館としての対応として何ができるかを計画していく。</p> <p>プラネタリウム番組で地域性を出すのは困難な中、昨年度の西武鉄道の車窓の風景や清瀬のひまわりに続き、今年度は下野谷遺跡との連携や圏域のアーティストと組むという手法で実現したのは大きい。今後も地域を題材としたプラネタリウム番組の作成を継続する。</p>	A+	A+	<p>企画展で地域資源の価値発信を積極的に行い、プラネタリウムのプログラム開発では圏域のアーティストと連携を図るなど、地域に軸足を置いて活動をしている点を大いに評価したい。また、科学と異分野をつなぐ活動や、自然環境保護系の市民団体との新たなつながりが生まれた点など、地域拠点としての役目を果たしていると思う。</p> <p>今後は、さらにテーマの深掘りを学術的に推し進め、地域に密着した進化形の企画展なども開催してほしい。また、地域資源を科学的な観点から示す企画展にも挑戦してほしい（例えば、土壌の微量元素を測定し、圏域の農産物・果実の特徴を科学的に示す展示など）。</p>

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総括的な意見等）
H26	<p>毎週マーケティング会議を開催し、方向性を検討し、下記のような成果を上げている。</p> <p>タブレット利用の対面型出口アンケートや圏域5市の市民祭りでの対面型未利用者調査で確実な顧客ニーズを把握、体験プログラムでは書き込み型アンケートで反応を把握。調査結果もとに科学館ニュースの戦略的配布と編集、ホームページへの反映でターゲットマッチングなマーケティング活動ができた。</p> <p>また、紙媒体・市報・マスコミ・有料広告・HPのトータル的PR活動により、20万を超える利用者の維持に貢献できた。</p>	<p>今後は、マーケティング担当以外のスタッフの顧客創造意識を高め、下記のようなサービスの充実を図りたい。</p> <p>具体的な内容がわかりやすく伝わる広報資料の作成、文化資源の解説計画やシニア層への解説計画の充実、未利用者のさらなる開発、ホームページでの展示物検索、科学館ニュースの増ページ（予算を見ながら適切に実施）等。</p>	A	A	<p>マーケティング活動も週1回の会議を設け、推進し始めたことによって、戦略的な取組を実施し、功を奏していると言える。</p> <p>今後は、マーケティング活動を通して得たデータを生かし、シニア層、中学生・高校生・大学生に向けた事業戦略を検討し、新規来館者層の獲得にも期待したい。</p>
H27	<p>館内アンケートは来館者に直接声掛けによる収集で来館者数の約1%（2,000件）の取得を継続し、またチケット発券時取得している来館者年代と合せ、来館者情報に関してはほぼ正確に把握できており、収集した情報を基に、広報計画を立て、実施し、来館者状況の変化を検証し、その結果を次の広報に生かすといった、広報活動のPDCAサイクルが出来ている。</p> <p>運営連絡協議会は大幅に委員の入れ替えを行い、第2次基本計画で策定された「地域拠点事業」の取り組み強化が新たなテーマに据えられた。平成27年度、28年度の2年間を掛けて同計画の見直し及び加筆を掲げ、そのための下地になる議論を多摩六都科学館組合ならびに指定管理者、本協議会との三者間で行っている。</p> <p>アクセス改善のため、3月の市民感謝デーにシャトルバスを運行した。</p> <p>また、平成28年4月から「はなバス第4北ルート」が運行開始となるため、花小金井駅発のシャトルバス内にポスター掲示他の広報活動を実施した。</p> <p>非利用者に対する利用促進として、シニア層に対しては4年前から秋にシニアキャンペーンを実施しており、この4年間でシニアキャンペーンでの来館者が5倍に増えている。また、大学生向けの学割キャンペーンや、中高生をターゲットに先端科学技術系講演会の時には、圏域内のすべての中学校、圏域及び近隣市区のすべて高等学校、関東近辺のすべてSSH（スーパーサイエンスハイスクール）にチラシとポスターを送付している。</p>	<p>運営連絡協議会では、圏域の市民や企業、大学、研究機関などとの連携により、従来の枠組みにとられない施策を作りつつあり、今後も継続して開催していく。</p> <p>また、平成29年度以降、現在臨時駐車場として使用している館南側の駐車場が使えなくなることになっている。</p> <p>そのため、「はなバス」での来館促進の広報活動を展開する他、GWやお盆期間等の特に来館者の多い時期の対応を検討する。</p> <p>シニア層の利用促進は効果が現われているが、中高生～20代に対しては種々の施策を施してはいるが、未だに効果が現われて来ない。シニア層とは違い世代が年毎に変わっていくため、継続して同じ施策を実施する事が必ずしも有効という訳ではなく、この世代を引き寄せる有効な施策を今後検討していく必要がある。</p>	A	A+	<p>運営連絡協議会が企業、大学、研究機関と連携を取り、従来の枠組みにとられない施策を作りつつあることは評価できる。</p> <p>課題である公共交通機関によるアクセスの改善において、「はなバス」の新ルート運行開始、感謝デーのシャトルバス運行などの取組は評価できる。</p> <p>また、中高大学生などの利用促進は来館者数の増加だけでなく、次世代の育成の面からもさらに進めることが望ましい事業であり、今後の施策に期待している。</p> <p>シニアキャンペーンによりシニアの来館者数が増加していることも評価できる。</p>
H28	<p>昨年度に引き続き、来館者に対する直接の声掛けによるアンケートと、来館者の年代をチケット発券時にデータ化し、来館者情報の正確な把握を継続している。開催するイベントとタイムリーな広報による利用者の増加により、圏域市民の当館に対する認知度も上がっている。</p> <p>運営連絡協議会で検討した地域拠点事業に関する提言を基に、圏域内外の数多くの各種団体との連携が作られ、その拠点としての役割を果たしつつある。</p>	<p>ファミリー層以外の開発として、カブリ数物連携宇宙研究機構（IPMU）との連携事業『アート・科学・哲学』のワークショッップは、年代を超えた双方向のコミュニケーションを実現した極めて優れたプログラムであり、今後の指針となる。</p> <p>シニアキャンペーンによるシニア利用者も増加を続けていたが、頭打ちとなってきており、今後は上述のように、主体的かつ能動的なプログラムへのキャンペーン計画が肝要と考えている。</p>	A	A	<p>既存の利用者層はしっかり捕らえており、マーケティングの観点でも連携が増えていることは評価できる。また、発券時の来館者属性の把握・分析を継続している点も高く評価できる。確実にアンケートやデータ取得、解析とその結果を活かす動きは進んでいるが、顧客満足度という観点からはまだ努力する余地があると言えよう。</p> <p>健康をテーマとした大学・医療機関との連携は、シニア層等へのアプローチに有効であり、今後の誘致策としても注目したい。シニア層に対しては、まずは科学館の認知度を高めるなど、新たなマーケティングが必要である。</p> <p>IPMUとの連携はユニークな活動であり、今後も続けることが望まれる。</p>

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総括的な意見等）
H29	<p>小学校4年生向け学習投影に、東久留米市の小学校だけが全校利用となっていなかったが、平成27年度3校、平成28年度2校の未利用が、今年度漸く全校利用となった。地道に校長会等での案内を継続した事や、館自体の認知度の向上によるものと考えている。</p> <p>来年度の学習投影にも圏域内のすべての小学校が引き続き利用してもらおうと共に、圏域外からの小学校の利用拡大をめざし、『学習利用の手引き』を分かりやすく且つ利用意欲が高まるような内容にリニューアルし配布した。</p> <p>昨年度の課題として記載したシニアキャンペーンに替わる新たなキャンペーンとして、「大人のカフェ&シアター」（③ 地域拠点事業-2に記載）を企画し、新聞折込等の広報を実施し大きな効果が上げられた。</p> <p>運営連絡協議会は秋の企画展と並行して『北多摩の農と食』をテーマに開催し、メンバーには地域の農家の方々にも加わって頂き、平成30年度末を目標に科学館として北多摩の農と食の魅力を如何に発信していけるかの検討をスタートさせた。</p>	<p>来館者に対する直接の声掛けによるアンケートと、来館者の年代をチケット発券時にデータ化し、来館者情報の正確な把握は継続しており、それらの情報を基に、開催するイベントのタイムリーな広報は引き続き継続する。</p> <p>しかしながら日曜祝日はこれ以上の利用者の増加は館のキャパシティ的に難しくなっており、今後は平日利用が可能な世代を中心とした未利用者向け広報を拡大していく。</p> <p>学校利用をさらに充実させるための一環としてリニューアルした『学習利用の手引き』を手掛かりに学校での学びに深くかかわれるような利用手法を開発する。</p> <p>運営連絡協議会ではテーマ『北多摩の農と食』を魅力発信に留まらずオリジナル商品開発レベルに高めることが今後の課題。</p>	A+	A+	<p>学習投影が圏域全校利用となった点や、「大人のカフェ&シアター」などの企画が成功しているのも、マーケティング活動の成果と考えられる。</p> <p>また、圏域内の小学校の継続利用と圏域外の小学校の利用拡大をめざし、『学習の手引き』をリニューアルし、学習利用の質を高めるだけでなく、新たな利用者層の獲得に努力している点も高評価である。</p> <p>さまざまなメディアを通してマスとローカル両面から広報活動が多様に行われている点は継続しながらも、今後は未利用者を利用者へと変えるアプローチをさらに進めていただきたい。</p>

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総合的な意見等）
H26	<p>科学館事業（中核事業）と地域拠点事業の二本柱を、スタッフが意識し具体的に行動化できるよう目標カードを導入した。グループ目標・チーム目標・個人目標を期首に定め、各リーダーのもとPDCAサイクルによる目標管理を実施した。</p> <p>事業予算を精査した年間計画を各グループに提示し、担当者の責任のもと、予算の裏付けをした上で事業の計画を進めることを重視し、事業推進管理を図った。</p>	<p>スタッフの中には、自主企画の意味や予算の執行の本質的な理解が不得意なものも存在するため、各リーダーの指導の下、本来の意味を理解した上で実質的な活動ができるよう改善を図りたい。目標を達成することが利用者中心を実現することにつながることを実感させたい。</p>	A	A	<p>目標カードの導入は、個人個人のミッションを明確にし、運営メンバー全員の事業ベクトルを合わせるためには有効なツールであり、平成26年度の事業結果を見ると、確実に成果が出ていると思われる。</p> <p>また、ボランティアをはじめ、地域企業・研究機関から多くの人的支援を得ていることは、体制整備の面からも大きな力を得ている。この点も大いに評価したい。</p>
H27	<p>第2次基本計画のコンセプトの理解が、目標カードに個々が具体的に地域づくりを目標として記述することによって浸透し、また1次評価をチームリーダーに任せた結果、チームのベクトルも揃い地域づくりを意識した活動が出来つつある。また企画面では、ほぼすべての企画展はスタッフが企画・製作・運営することを継続しており、またスタッフの立案した新たなプログラムも数多く実施される等、スタッフのスキル向上が顕著に現われてきている。マーケティング・広報意識も担当者とのコミュニケーションがスムーズになり効果をあげている。地域づくりの意識の結果が、地域の団体との連携が広がっており、地域市民個人との顔が見えるネットワークも構築されてきている。</p>	<p>今まで未着手であった外部資金活用に関し、その活用に関わるコストと導入のメリットを含め調査・検討を開始する。また、館施設の有効活用と新たな収入源確保のため自主事業の実施を拡大する。</p> <p>目標カードのしくみにより、地域づくりを日常的に意識する文化を創りたい。またそれに合わせた館スタッフのスキルをさらに向上するため、乃村工藝社が運営している他館を始め、外部施設での研修の機会を増やし視野の拡大を可能とするよう計画する。さらなる利用者増をにらんで戦略的に人員計画・育成計画を進める。</p>	A	A	<p>効率的な組織運営において、目標カードが機能し成果をあげているとともに、企画展の立案・製作・運営をスタッフが継続して実施することにより、「経験知」が組織に蓄積され、さらなるスキル向上が期待できる。</p> <p>外部資金の活用と共に、巡回展の企画製作とその運用により他園館との連携を強化し、効率的なPRと当館の外部評価の向上にもつながるものと期待している。</p>
H28	<p>今年度は東京都環境局と共催で、東京都が進めている「水素社会」をテーマに、水素イベント「つくる、うごかす、あそぶ～水素は未来のエネルギー！」を開催した。東京都と新たな連携の枠組みをつくり、相互の責任と費用負担を明確にした新規の取組みとして捉えている。</p> <p>また、以前から懸案であった乃村工藝社が指定管理をしている他の施設との連携や、企画展の巡回は漸く進み始めた。</p>	<p>乃村工藝社が指定管理をしている他の施設との連携は、現時点では、多摩六都科学館が他館を支援するケースが多い状況にあるが、今後はお互いにWin-Winの連携を進める。</p>	A	A	<p>指定管理者が運営している他の施設で、多摩六都科学館のオリジナル・コンテンツ（企画展示）を巡回させる動きもあり、今後は収入面での期待も持てる。こうした連携強化による取組は評価できる。</p> <p>また、他機関や団体との共催により、物的支援やソフト面での支援等を獲得できており、直接的ではないが財政支援につながっている点も評価したい。</p> <p>科学館の目的に適合した補助金・助成金の獲得に努力の余地はあるが、それよりも共催事業による事業の拡大を優先すべき時期と思われる。</p> <p>さらなる発展は、5市との連携強化や教育・産業分野における連携が鍵となるのではなかろうか。今後の課題として検討してほしい。</p>
H29	<p>第1期の指定管理運営開始以降、ロボットパークを除く企画展は、すべて館スタッフで企画・設計・製作を行っており、館スタッフの企画力や業務に対する意識は飛躍的向上を見せている。</p> <p>2020年度から小学校でのプログラミング教育が始まるため、科学館として今後プログラミングに関する教室は必須と考えており、プログラミング教室開催用機材を揃えた。</p> <p>2020年度に向け、より利用者サービスの向上(特にアウトリーチの充実など)を図るため、天文グループの人員増を含め常勤スタッフを3人増員する。</p>	<p>集客の両輪であるプラネタリウムの生解説とラボでの実感を伴った体験(観察・実験・工作)について、再度各スタッフ一人一人のスキルの棚卸を実施し自己スキルの魅力を確認の上、さらなるレベルアップを目指す。具体的にはアクティブラーニングの思想=主体的・対話的で深い学びがあり、これまでの経過の中でかなりのレベルで達成されていることを個々が認識することがベースになる。</p> <p>日曜祝日等は利用者数は館の物理的限界に近くなっており、これ以上の利用者数の大幅増は見込めず、利用料金収入の伸びが頭打ちとなることが予想される中で人件費が増えることになるが、平日や土曜の来館者増の施策を取ると共に、業務の効率化による残業の削減を進めていく。</p>	A	A+	<p>プログラミング教室開催用機材を拡充したり、利用者サービスの向上に向けてスタッフを増員したりと、事業予算の枠組みの中、最大限の努力に努めていると思う。</p> <p>また、企画展を自前で実施し、自己研鑽プログラムの充実などにより、スタッフの力は確実に向上している。引き続き能力向上プログラムを充実させ、体制の強化につなげてほしい。</p> <p>スタッフの企画力ならびに業務に対する意識の向上は大いに評価できる。</p>

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総合的な意見等）
H26	中期的な成果指標について評価手法の検討を行い、市民モニターの試行を行った結果、モニター制度や業績評価の手法などで評価システムを改善できた。	中核事業や地域へ展開していく活動の社会的価値を、利用者やスタッフの「変化」と「成長」を通してモニタリングし、内部のマネジメントに反映させたい。	A	A	組合の場合、長期的な観点からの取組が多いため成果が見えづらいが、早急に取り組むべき課題であった市民モニターの導入実施に着手したことを評価したい。
H27	中核事業のコミュニケーションを基軸とした学習活動等の評価に市民モニター制度を適用することで、これまで評価の難しかった科学への興味喚起度や地域社会への貢献について、利用者（圏域市民）の目線で検証することができるようになった。	長期的には、市民との対話を通じた科学館経営の新たなモデルを作ることを目指す。短期的には、市民モニターの評価を事業評価活動全体の中で適切に位置付け、着実な運営改善に結び付けていくことが課題である。	A	A+	市民モニター制度は、科学館のステークホルダーである市民の声を直接聞ける制度であり、貴重な意見が多数寄せられており、高く評価できるものである。 子どもをもつモニターについては、数年後に追跡調査をかけることにより科学館の教育的な効果を把握することが可能になると期待している。
H28	市民モニターによる継続的な評価活動を推進し、事業評価を行うことに留まらず、指定管理者との話し合いによって科学館の運営に市民(利用者)の意見を直接反映させる仕組みができつつある。 地域のニーズを考慮し、学校、児童館、公民館、お祭り、自然観察会等でアウトリーチ活動を行っている。受入側との連携を重視し、継続的な学びの機会をつくれるよう心掛けている。 シニアキャンペーンで構成市の会合でのPRや施設訪問を行った他、グルメフェスティバルでは各市の産業振興、商工会等との連携を進め、新規利用者の来館を促進した。	アウトリーチ活動は事業量（回数）よりも学習活動としての波及効果や連携の強化にポイントを置いて評価する必要がある。 コミュニティカフェによるサードプレイスの実現に着手した。 半面、指定管理者の各業務(量)が最大化していて、事業提案書にない取組みである施設貸出しや無料ゾーンについては、目標を定めず継続して考慮していくこととしたい。	A	A+	市民モニター制度を実施することによって建設的な意見を継続的に得て改善につなげている点や、アウトリーチ活動を継続的に実施できている点を評価したい。 アンケート結果によると50代、60代の利用者が各々4～5%と特に少ない。この層の取り込みが今後の課題と言えよう。 設置者としての立場から、圏域の行政・市民の動向を俯瞰し、適切に指定管理者を指導している。今後さらに圏域の様々な地域資源との連携を主導してほしい。
H29	市民モニターの活動は、継続的な視点で定性的な評価を得るのみならず、圏域市民と運営者が直接意見や情報の交換を行う場を作りだし、相互理解に寄与している。 圏域内のサテライトや施設貸出しの課題については、構成市の公共施設管理計画の動向も参照しつつ、施設の基本構想や設置理念との整合性を考慮して実現性について再検討したい。	市民モニターの継続が難しい方もいるので、新たなメンバーの募集が課題。 圏域内のサテライトや施設貸出しを検討する際には、使用料の収受が可能か、それにより実効性の高い収支が図れるかなど、経済性の観点から困難が指摘されている。 地域のニーズに合わせていくには、アウトリーチ活動（出張事業等）に注力した方が持続的な活動とすることができるものと思われる。	A	A	市民モニターの意見聴取は、科学館の事業推進や評価活動においても非常に重要なので今後も継続してほしいが、科学館が取り組んでいる市民モニター制度に対する圏域市民の認知度が低いように感じる。この点を改善できるよう努力が必要。また、市民モニター活動の中にこれからの科学館を支える若者層（大学生・高校生）をもっと巻き込んでいくべきだと思う。 ソーシャル・インクルージョンに関する取り組みは、圏域のさまざまな主体と協力しながら、地域にある課題を研究し、ターゲットを明確にした上で具体的な策を検討していただきたい。

4. 評価結果（定性評価）

自己評価			外部評価		
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総合的な意見等）
H26	駐車場整備やアクセスサービス等で、より利用しやすい施設となるための方策に取組んだ。 構成市とのさまざまな連携・協働の橋渡しを進めている。	圏域市民の調査を実施して、広報やマーケティングのアウトカムを中期的に検証することが今後の課題。 引き続き、構成市の幅広い要望に応えられるよう努める方針である。	B	B	平成26年度中に完成予定であった駐車場の整備や施設の長寿命化計画の策定が翌年に持ち越された点、運営協議会の見直しなども検討段階止まりだったことから、B評価とする。
H27	駐車場整備事業の新設部分について完了し、駐車量の供給が十分になったことで利用者増につなげることができた。 通常業務のほかに整備事業の過程でも指定管理者と十分に協議することで、適切な監理を遂行できた。	平成28年度からのコミュニティバス経路の変さらに伴い、公共交通の利用をアピールするほか、アクセスの改善に向けた情報収集に努める。 また、ユニバーサルデザインとVIの推進をさらに検討したい。	A	A	科学館の利用者にとって、駐車場のキャパシティの拡大は潜在的な利用需要の掘り起こしにつながった。 新しいコミュニティバスのルートはその維持のためにも、公共交通機関の利用者に対するインセンティブについてなんらかの検討を期待する。
H28	駐車場整備事業の最後となる館庭のバス停留所等整備工事が完了した。また、西東京市のはなバスのルート変更で花小金井駅まで延伸されて、公共交通のアクセスが向上した。	アクセスをより改善するため、路線バスの誘致など、構成市やバス会社と話し合いを進める必要がある。借地駐車場を返還したため、ピーク時に路上待機車両等が発生しないよう対策を練る必要がある。	A	A	駐車場の整備によって利用者の利便性や安全面での改善がなされた。また、はなバスのルート変更で公共交通機関のアクセスが改善されたことは評価したい。しかし、借地駐車場の返還により駐車台数が減少することから、マイカー利用者の利便性についてはさらなる対策が必要と言えよう。 西武池袋線沿線やバス路線のないエリアからのアクセス改善は、依然として大きな課題となっている。
H29	H28のはなバスの花小金井駅乗り入れにより、科学館へのバス利用便は大きく向上した。 ネーミングライツに関心を持つ事業者の調査として、組合指定金融機関の法人営業部担当者に依頼をしている。 財政計画の改定（平成30年度）に合わせて、長期修繕計画作成業務を平成30年度予算編成で計上し、実行性の高い施設の長寿命化に取り組む。	アクセス対策では、東久留米市と西東京市にまたがる都市計画道路の開通に伴い、科学館経由の路線の検討について路線バス運行会社と情報交換を行った。今後、具体的な検討にまで着手できるか、継続的な働きかけが必要である。 施設の維持補修経費に係る組合の財政状況が非常に厳しいことが大きな課題である。今後、構成市とも相談し、組合の財政を適正に保つよう努めていく。	A	A	駐車場整備、はなバスルート変更（花小金井駅への乗り入れ）が定着し、来館者数も24万人台を確保していることは高評価である。公共交通機関のアクセス改善は非常に大変なことで、継続的に取り組まないと実現できない。それを実現した点は大いに評価できる。 また、さらなるアクセス改善に取り組んでいる姿勢も評価したい。 施設の老朽化対策は、現前の大きな課題である。組合は長期修繕計画策定を確実に進めていく必要があるが、施設の維持補修は組合だけでは実現できるものではない。引き続き、構成市の理解を得る努力を続けてほしい。 昨今では、正月休みにミュージアムが開館している事例も見られるようになった。多摩六都科学館でも、圏域市民の利用サービスの一環として正月休み期間中に1日でも開館できるか検討してほしい。

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評定	総評（総合的な意見等）
H26	<p>中核事業の体験型コミュニケーションは、コンテンツの充実が図られ、アンケートでも順調に進化していることが実感できる結果となっている。</p> <p>地域連携の拡張に努めた結果、市民や企業との協働は、おおむね良好に進んでおり、今後も期待できる成果を上げたと言える。</p>	<p>未就学や小学校低学年層への体験型プログラムの顧客満足度はほぼ達成できたが、高学年、中高大・シニアへのステップアップ等、多様な学びの場の構築が今後の課題である。体験活動時の双方向の対話を重視したい。</p> <p>地域連携は、事業の質をさらに深める。</p> <p>駐車場整備事業を完了させ、施設の計画的な補修等を組合と密に連携し実施していく。</p>	A+	A+	<p>駐車場のマイナス要因がありながら、20万人を超える利用者数で得ることができた事業内容を高く評価したい。また、通年利用者数が減る2月～3月に学割などの方策をとり、利用者数を底上げする成果をあげている点も評価に値する。平成25年度策定の基本計画で、新たな柱として掲げられた地域連携事業についても、運営メンバーが一丸となって取り組み、初年度でありながらめざましい成果をあげた点を大いに評価したい。</p>
H27	<p>『科学を楽しむ』を基本とした体験型プログラムの内容充実とコミュニケーションスキルの向上、5回更新される生解説のプラネタリウムが相乗効果をあげており利用者の総合的満足度はほぼ90%を確保している。常時開かれているボランティアのからだラボも好評。各コミュニケーション手法が利用者増につながっている。</p> <p>上記各事業の企画担当と情報共有し利用者目線でタイムリーなターゲットマッチングした科学館ニュース、HP、チラシ、新聞広告を打っている。新規ファミリー層獲得の取組として、転入者に対する、各市からの案内書類内に科学館のパンフレットを入れて配布している。</p>	<p>マーケティングの項でも記載しているが、中高生～20代の利用が少なく、この世代への対応が課題である。文化やアート系のプログラムの検討も含めコミュニティー、地域で起業など『地域づくり』に関連したことも検討する。小学生低学年以下、小学生高学年～中学生、中学生～大人と各世代向けプログラムはかなり充実してきている。アクティブラーニングやクリティカルシンキングなど教育界で課題になっている項目も含め、各プログラムの改善や新たなプログラムの開発を行う。</p> <p>地域の団体や市民との連携は、新たな連携先を開拓すると共に連携実績のある団体のサポートや地域づくりに向けての内容の見直しや改善による連携の進化を進める。</p>	A+	A+	<p>来館者数が過去最高となったこと、利用料金比率が過去最高の31.7%を示したこと、市民モニターの評価も高いことは、すべて大きく評価できる。</p> <p>市民モニターから得た利用者視点の有益なアドバイスをすぐに実行に移すとともに、科学館活動の全体的なレベルアップを果たし、来館者増の数字以上に地域科学館としての使命を果たしていると考えられる。</p> <p>ターゲットごとにプログラムを充実させる上でも、館で働くスタッフの高いモチベーションを維持する施策も検討に値すると考える。</p>
H28	<p>16万人台から5年目にして25万人以上の利用者を迎えることができたのは、地域の方々から価値を認めていただいた証しである。地域づくりに取り組んで3年目でスタッフの地域づくりに対する認識はようやくスタートした状態だが、市民と研究施設との連携は着実に進展している。</p>	<p>ファミリー向けプログラムの充実で過去最高の利用者を達成できた。今後は、専門性とエンターテインメントの両スキルを地域づくりにターゲットに定めてプログラムの価値を高める。自立化の進んだボランティア活動を地域連携の核に据えて、名実ともに市民の科学館を目指す。</p>	A+	A+	<p>第2次基本計画（中長期計画）に沿って、行き当たりばったりではなく、明確な見直しを立てて、これだけの成果を出していることは高く評価できる。</p> <p>利用者増の結果は、これまでの取り組みの大きな成果と言える。25万人以上の来館者を率直に評価したい。また、地域連携の「種」は着実に芽（成果）が出てきていると思われる。これらの成果も大いに評価したい。</p> <p>組合・指定管理者の組織が全体的にバランスよくかみ合っており、事業推進が成されている。地域における科学館の認知・存在価値も高まっているように思われる。利用者の増大の他、市民モニター制度を定着させつつある点や市民モニターによる評価の高いことなどから、A+とする。</p>
H29	<p>今年度は地域を強く意識した企画や、実験的イベントが数多く実施できた。</p> <p>地域の魅力関連では、東久留米市出身のアーティスト・大小島真木氏による88星座、秋の企画展『今晚なに食べる？』、春の企画展『たまるく水辺の案内所』で地域の価値の言語化並びに市民活動の内容の発信ができた。</p> <p>さらに秋の企画展を受けて運営連絡協議会でも『食と農』を展開し、協定先の東京大学生態調和農学機構、機械振興協会、西武鉄道や、各圏域の気鋭の実験的農家との市民参画の農と食のあるべき姿のイメージ化をしつつある。</p> <p>実験的イベントとしては、IPMUによるオール英語のサイエンスカフェ、夏の企画展では、集客が心配されたが難解な数学を取り入れた『パズル展』、さらに平日大人向けの講座開催等を実施し、すべて期待以上の成果が出ている。</p>	<p>科学館という施設の性格上、科学リテラシーの育成が、地域リテラシーの向上につながっていくことが一番望ましい活動であり効果が大きい。そのことを踏まえ、多くの人が集まる場所の特性を生かした、地域の方々世代や立場を超えて交流し、生涯学習や社会参画をする地域づくりの場となることをさらに進める。</p> <p>ソーシャル・インクルージョンをベースに、地域の課題解決やコミュニティーの再生を果たすべく、科学館が地域の交流拠点（コミュニケーション・プラットフォーム）となって、地域の人々や研究機関などの活動を支援し活性化が進むよう、地域づくりに取り組む人材の育成へとつなげていく。</p> <p>また一方で、科学館の活動を通して地域資源の発掘や価値づけ、地域資源の言語化を行い、多摩六都の魅力を広く発信する。</p>	A+	A+	<p>年間の利用状況（24万人の来館者数）、経営状況、中期目標に対する成果、年齢別プログラムの実施と成果等、定量指標も定性指標も大きな成果を上げている。</p> <p>また、全英語のサイエンスカフェ、平日の大人向けの講座、パズル展などの企画展、「食と農」という新しいテーマへの取り組みなど、意欲的かつ実験的な事業を数多く実施され、それぞれに成果を上げたことは高く評価したい。さらに、新企画を試みながらもこれらの中から定番となる事業を育てていただきたい。</p> <p>地域とつながる新しい企画を打ちだし、量的にも質的にも着実に成果が上がっている。地域資源の発掘・価値づけは、多摩六都科学館の重要な活動のひとつとして、今後も継続して取り組んでほしい。</p> <p>「ソーシャル・インクルージョン」への取り組みは意欲的なことではあるが、慎重に進めるべき課題だと思う。地域課題というのは一般論ではなくて、圏域の地域課題とは何なのかを現況把握した上で精査していくことが必要だと思う。</p>

本報告書2～20頁の「2. 中期の重点戦略ならびに業績指標」一覧内の「事業概要」列に記載されている番号は、「指定管理者事業報告書」内で、その指標に該当する事業項目を指す。
 詳細は「指定管理者事業報告書」を参照。

多摩六都科学館事業一覧

平成29年度 指定管理者事業報告書 目次		該当頁
I	概要	1
	1 指定管理者	1
	2 施設概要	3
	3 施設の利用状況	6
II	指定管理業務事業報告	9
	1 科学館事業	9
	1-1 調査研究・収集保存活動	9
	1-2 展示活動	12
	1-3 天文映像活動	21
	1-4 参加体験型学習活動	25
	1-5 学校連携・支援	27
	1-6 人材育成・研修活動	32
	1-7 研究機関・関連団体との連携活動	37
	2 地域拠点事業	42
	2-1 地域の交流拠点活動	42
	2-2 地域資源創造・魅力発信活動	50
	3 マーケティング	51
	3-1 顧客開発	51
	3-2 市場調査	52
	3-3 広報・PR活動	53
	4 運営管理	56
	4-1 チケット発券・利用案内	56
	4-2 安全管理業務	56
	4-3 設備管理業務	57
III	収支報告	61
	資料	64
	利用者アンケート集計結果	74

多摩六都科学館組合事業評価委員会条例

平成16年3月3日
条例第2号

(設置)

第1条 多摩六都科学館の事業評価を行うため、多摩六都科学館組合事業評価委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(所掌事務)

第2条 委員会は、管理者の諮問に応じ、次の事項について調査し、検討し、及び答申する。

- (1) 主要な事業成果の検証について
- (2) その他管理者が必要と認める事項

(組織)

第3条 委員会は、学識経験を有する者のうちから、管理者が委嘱する委員5人以内で組織する。

(委員の任期)

第4条 委員の任期は、2年以内とする。ただし、再任を妨げない。

2 補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第5条 委員会に委員長及び副委員長を置き、委員の互選により定める。

2 委員長は、委員会の会務を総理する。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるとき又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

(招集等)

第6条 委員会は、委員長が招集する。

2 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、会議を開くことができない。

3 委員会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第7条 委員長は、必要があると認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(庶務)

第8条 委員会に関する庶務は、多摩六都科学館組合事務局において処理する。

(補則)

第9条 この条例に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が別に定める。

附 則

この条例は、平成16年4月1日から施行する。

多摩六都科学館組合事業評価委員会委員名簿（第6期）

多摩六都科学館組合事業評価委員会条例（平成16年条例第2号）第3条の規定に基づき、5人の委員に委嘱している。

役 職	氏 名	所 属
委員長	柴田 徳思	東京大学 名誉教授
副委員長	桧森 隆一	北陸大学 副学長・教授
委員	小谷 泰弘	東久留米市在住市民（科学館ボランティア会代表）
委員	坂本 和弘	多摩動物公園 副園長兼教育普及課長
委員	杉浦 幸子	武蔵野美術大学 芸術文化学科教授

多摩六都科学館組合市民モニター設置要綱

平成 27 年6月1日
決定

(目的)

第1 多摩六都科学館組合(以下「組合」という。)における事業評価活動を推進し、市民の理解と協力を得てニーズに適った効用の高い科学館運営を図ることを目的として、市民モニターを置く。

(職務)

第2 市民モニターは、次の職務を行う。

- (1)組合の依頼する調査等に協力し、意見を述べること。
- (2)市民モニター会議、研修会等に参加すること。
- (3)その他組合の事業評価活動と広聴活動推進に関して必要な事項に協力すること。

(定数及び委嘱)

第3 市民モニターの定数は、10名以内とする。

2 選任は、原則として公募により、年齢、地域等を考慮して、組合管理者が委嘱する。

(資格要件)

第4 市民モニターは、次の要件を満たす者とする。

- (1)満 20 歳以上の組合構成市の市民であること。
- (2)組合の公職者及び組合構成市の職員でないこと。

(委嘱期間)

第5 市民モニターの委嘱期間は、1年以内とする。

(委嘱の取消し)

第6 市民モニターが、次の各号の一に該当するときは、委嘱を取り消すものとする。

- (1)第4に定める資格要件を失ったとき。
- (2)辞退を申し出たとき。
- (3)職務の遂行ができなくなったとき。
- (4)その他組合管理者が取り消す必要があると認めるとき。

(報償費)

第7 市民モニターに対しては、予算の範囲内で謝礼を支払うことができる。

(庶務)

第8 市民モニターに関する事務は、組合管理課が行う。

2 管理課長は、必要に応じて、多摩六都科学館指定管理者と次に掲げる事項を協議する。

- (1)市民モニター会議・調査の課題の決定。
- (2)その他本業務運営に関すること。

(委任)

第9 この要綱に定めるもののほか、必要な事項については組合管理者が別に定める。

附則

この要綱は、平成 27 年6月1日から施行する。

市民モニターによる評価実施の目的

多摩六都科学館組合は、市民モニターによる評価は、下記目的のために実施する。

- 事業結果や定量的な調査では測れない指標について、圏域市民の立場から定性的に評価を行う。
- 定性的な実績指標について、中期的な観点から、年度毎の評価を行う。
- 多様な立場のステークホルダーからの支援を継続していくために、変化していくニーズや価値観を把握する必要がある。そこで、市民モニターを通して圏域市民の「支援開発志向」を定点で調査できる手段としても活用し、支援体制や協力体制のあり方やニーズの把握に役立つ。

多摩六都科学館組合事業評価 市民モニター名簿

市民モニターの人選は、多摩六都科学館のステークホルダーのうち、中長期的な観点から科学館事業を定性評価できる圏域市民8名の方々に依頼を行った。

No.	住所・所在地	性別	ステークホルダー種別
1	小平市在住	女性	市民・友の会・公募
2	小平市在住	女性	市民・友の会・公募
3	清瀬市在住	男性	市民・友の会・公募
4	小平市在住	女性	市民グループ
5	西東京市在住	女性	市民グループ
6	西東京市在住	女性	市民グループ
7	東久留米市在住	女性	事業協力者
8	西東京市在住	女性	学生・継続的ユーザー